

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「懐かしい正月の思ひ出」

戦争前のこと、呉服屋という商売も盛んだった頃、食事は家族揃ってすることは無かったが、正月の元旦だけは家族も店の者も台所手伝いの者も全員揃って席に着いた。祖父は文学好みの人で漢詩や水墨画をしていたので漢詩を披露し、母は短歌を、姉と私は書き初めを鴨居から垂らしてもらった。店員達は俳句を一句出すことが慣わしとなっていたので、正月近くになると何やら紙を出して書きつけていた姿を思い出す。

小学校を出たばかりの店員は「小僧」と呼ばれ、「〇〇どん」の名を貰っていないのだが、ある正月に小僧さんが俳句を披露した。「正月や梅に鶯ほうほけきよ」。季語ばかりの句で皆一斉に笑った。私は小学校一年生だったが、その場の皆の笑顔はよく覚えている。私が俳句の道に入ったのも、今思えばこれがきっかけだったように思う。

呉服屋という商売は、大福帳は筆で書き、算盤もできなくてはならず、夜は囲い帳場の前で算盤の練習をしたものだった。店員に交ざって私も算盤を覚えたので、女学校に入った時はすぐに三級を取ることができた。番頭の中に字の素養が抜きん出た「隆どん」という人がいた。祖父が東京の書家の所に修行に行かせ「竹峯」という雅号を貰ったほどであった。売り出しの時など店頭に出す看板は隆どんの見事な字で書かれ、私達姉妹も習字を教えてもらった。

台所手伝いの女の人達には、交替で裁縫所に通わせ、縫物仕事に不自由のないよう和裁を身につけさせた。取引のあった箆笥職人に箆笥を作らせて、着物が箆笥一杯になると、嫁入り先を見つけて箆笥と一緒に嫁に出した。番頭と一緒にになった人もいたが、お嫁さんの実家は大喜びだった。そのうち「うちの娘を店で雇って欲しい」と頼まれるようになり、良い家柄の娘さんが勤めに来てくれた。桐畑を持っていた理由も箆笥をつくるため、店で働いてもらいなから人を育ててもいたのである。

昭和初期、鬼怒川に橋がかかり町の入口に汽車が停まるようになった。橋と駅を結んだ三叉路の所に広い土地を買い、昭和八年頃には珍しい洋館二階建の店を建てたが、戦争になり番頭も父も出征した。番頭二人は戦死、父はニューギニアから復員したが、マラリアを治すキニーネという薬で体が黄色くなり五十代で心筋梗塞で亡くなった。

世の中も変わり、和服を着る人も少なくなり、店の跡を継ぐ人もなく廃業して、今も店は売れずに残ったままである。隆どんの太い大きな字で書かれた大売出しの看板の映った写真を見る度に、当時のあれこれを思い出す。

紅白の繭玉揺るる箱階段

久子

「酉年の私」

以前に、娘と奥鎌倉を旅行した折、干支で運勢を観てくれる所があるので訪ねたことがあった。酉年生まれの私は何と言われるのだろう。一般には、「バタバタ貧乏で、突っ突き、突っ突かれる」等、ろくな事を言われぬ。占い師曰く、「酉年でもいろいろありますよ。孔雀の様な優雅で美しい鳥もいますからねえ」。ならば是非、観て下さいと飛びついたが、結局、「庭鶏は、卵はなんぼでも産むが、最期は食べられてしまう」と云われ、孔雀タイプではないことがはっきりした。なるほど、思い当たるところは大いにある。

戦時中は食糧難で卵も高価だった。どの家も鶏を飼っていて、実家でも常に六、七羽がいた。昼間は庭に放ち、夕方に小屋に入れるのが私の役目だったが、鶏といえども人を見るらしく、私を臆病者だと見抜くと追いかけてきては私のふくらはぎを突っ突いた。「私は酉年で仲間なんだから」と叫ぶのだが聞き入れてもらえず、いつも痛くて怖い思いをした。最後は大人の誰かが出てきて手伝ってくれたが、一番嫌な仕事だった。そのせいで鶏が嫌いで鶏肉が食べられず、卵も食べられなかった。栄養が摂れないので、学校の先生からはいつも顔色が

悪いと心配されていた。

それが良くなかったのか、酉年生まれのせいなのか、これまでを振り返ってみると突かれ切られて手術ばかりの後半生だった。盲腸、乳癌、甲状腺癌、胃の腫瘍といろいろな病気を経験してきた。まるで「斬られ与三郎」の如しである。最近では、右腕の骨折という大けがもあった。八十八歳まで、よくまあ生きてこられたものよと不思議なくらいである。

同じ鳥類でも雀どちは枝から枝に飛び跳ねるが、鶏は雀のようにはいかず、肝心の飛ぶための羽根も抜けていたりする。今思えば当時、鶏が突つてきたのは「酉年なんだから気をつけて生きていきなさいよ」と警告してくれていたのかもしれない。

羽抜鶏枝の雀に囃されて

久子